

研究課題	教職大学院生の「カリキュラムデザイン」に関する捉え方の変容		
氏名	原口 るみ	所属	教職大学院
		職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ - 受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 本研究では、本学教職大学院生のカリキュラム及びカリキュラムデザインに関する捉え方の実態を把握すると共に、教職大学院の授業を通してその捉え方がどのように変容していくのかを分析することを目的とした。「カリキュラムデザイン」2クラスの2023年度受講者68名のうち、研究協力の承諾を得られた67名分のデータを分析対象とした。なお、受講者には口頭並びに文書で研究への参加は任意であり、授業の成績等に関して不利益は生じない等の説明を行った。 受講者による省察の記述データを分析対象とし、KH Coder 3.Beta.03i（樋口，2020）を用いてテキストマイニングを行った。授業開始前の実態としては、カリキュラムに関する知識は一定程度あるものの、カリキュラムデザインを自分事として捉えている様子は確認されなかった。初回の授業後の省察からも、多くの受講者がカリキュラムについて表面的に捉えていたと自覚していたことがわかった。その後の省察から、「カリキュラムデザイン」の授業を通して、それまで意識せずに使用してきた言葉の語源や定義に立ち戻り理解を深めるようになっていったことが確認された。さらに、カリキュラムの多様な側面を自らの言葉で捉え直そうとする受講生の姿も見られた。この、多様な視点からのカリキュラムの捉え直しは、受講生自身がカリキュラムデザインを行う課題においても生かされていた。このことから、教職大学院における「カリキュラムデザイン」の授業構成に際しては、言葉の問い直しが有効である可能性が示唆された。 さらに、校種や教科の枠を越えてカリキュラムを俯瞰する授業によって、学生自身が直接的に関わる校種や教科にとどまらず、広い視野でカリキュラム捉えられるようになっていく様子がうかがえた。また、時代を超えてカリキュラムを俯瞰する授業後には、社会の変化に応じて変化するカリキュラムに対応できるよう、学び続ける教師であることの重要性についての気付きが芽生えていた。加えて、学校図書館を計画的に活用するなど、学校のリソースをいかしながら、教育の本質的な目的を見据え、子どもの姿を思い描きながらカリキュラムデザインを行うというイメージが持てるようになっていた。 また、受講者は一学期間の「カリキュラムデザイン」の授業体験を通して、対話的な学びの価値として、他者の多角的な視点を知ることができる点や、自分の理解を自覚できる点などを実感していた。毎回の授業で行った受講生同士のグループ対話のテーマに関連した省察が多く見られたことから、教職大学院における「カリキュラムデザイン」の授業構成に際しては、対話のテーマを精選することで、学びをより深められることにつながる可能性が示唆された。 全14回の授業終了時にはカリキュラムを多様な側面から捉えるとともに、自らがそのデザインに関与するという認識に至っていた。カリキュラムデザインは、すべての教師に求められるため、教育者研修プラットフォーム等のコンテンツ開発にも活用できると考えられる。一方で、本研究で扱ったデータは一つの教職大学院の単年度の受講生によるものであり、今後、他の教職大学院や複数年度にわたる広域的・継続的な調査を行うことでより普遍的な知見を得ていきたい。 <u>参考文献</u> 樋口 耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析〔第2版〕 - 内容分析の継承と発展を目指して - , ナカニシヤ出版 . 【研究成果発表方法】 学校図書館活用に関する教職大学院生の考えの変容—カリキュラムデザインの授業を通して—, 原口 るみ, 日本学校図書館学会研究大会, 2023年9月（口頭発表） 教職大学院生の「カリキュラムデザイン」に関する捉え方の変容—学校図書館活用に焦点を当てて—, 原口 るみ, 学校図書館学研究, (執筆中, 2024年10月投稿予定)			

発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。